

「パネルディスカッション」
「水とみどりの環境で地域を豊かにする試み」
北海道幹線水路フットパスの魅力と可能性



パネリスト

- 辻井達一氏（財団法人北海道環境財団理事長）
- 眞野 弘氏（北海道土地改良区理事長）
- 小林昭裕氏（専修大学教授）
- 小川 巖氏（エコネットワーク代表）
- 伊藤勝實氏（南幌町観光協会会長）

コーディネーター
濱田暁生氏（NPO法人ふらっと南幌代表理事）



小林 昭裕氏
富山県出身。北海道大学大学院環境科学研究科を卒業。1983年、専修大学北海道短大講師となり、現在は同大みどりの総合科学科教授。日本造園学会北海道支部長、北海道自然環境保全審議会副会長を務め、読売新聞に連載を持つ。



伊藤 勝實氏
北海道南幌町生まれ。昭和63年4月鮎店「鮎半」を設立。
町おこしグループ燦陽会初代会長。平成12年4月南幌町観光協会会長。平成18年4月食品衛生協会岩見沢地区副会長



眞野 弘氏
岩見沢生まれ。酪農学園大学農機農工学部卒業。北海道土地改良区理事長。北海道土地改良区土地改良事業団連合会理事長を経て、07年4月会長理事に就任。北海道農・水・環境保全向上対策協議会北海道国営土地改良事業促進協議会会長などを務める。



小川 巖氏
北海道松前町生まれ。1969年信州大学農学部林学科卒業。「エコ・ネットワーク」の代表で、北海道自然環境分野の第一人者。札幌学院大学にて生物、同実験等を担当（昭和59年以降通年）。他に北海学園大学、札幌大学、酪農学園大学等で非常勤講師を勤める

眞野

いま北海道土地改良区は「みどりネット」と言っています。水白書では一人一日300リットルを使用とのこと。また一トンの米を作るには5000トンの水が必要です。したがって農業こそ自然エネルギー利用の優等生と言える。赤平から南幌の勾配は低いのでフットパスには最適。農業基本法の精神に「土だけでなく人の心を耕す」もある。今後、社会貢献につながるソフト事業も考えられる。事業仕分けなど取り巻く情勢は厳しいが、可能な限り協力したい。

小川

長大な北海道幹線水路のフットパスに活動することで、ビジネスチャンスも生まれるだろう。整備、それらをつなげる手もある。人を引き付けることを念頭に活動することで、ビジネス

辻井

観光になり得る。また、三重湖周辺に森づくりを計画。水の流れを復活、昔に再生したい。

小林

フットパス参加者の意識は確実に変化。そこに歴史遺産や都会にない「農村風景」を感じるからだ。町外に向けた「公園」を作ったり、違和感のない周りの雰囲気マッチするイベントを作るのも良いだろう。砂川市では社会科の副読本に「北海道幹線水路」が記載。他の関連市町では見ない。北海道の穀倉地帯の基盤となった遺産をもっとアピール出来ないか。市街地では「公園化」が進んでいる。水路の上を可能な限り「花畑」にして人が歩ける様に

伊藤

南幌で生まれた。昔から北海道幹線水路には世話になっていた。資料ではいまはない「鶴沼」まで。線路をまたぎ、川の下をも通した偉業だ。新夕張川を含めて観光にどうつなげるかが問題だ。コンクリートで埋めた所を花壇にすることなどは、一つの

北海道幹線水路
赤平市から南幌町まで約80キロにおよぶ日本一長い農業専用の水路。1924年に着工、4年4カ月で完成した。いくつかの川を渡るため水路橋や逆サイフォンの難工事を克服した。美幌市には調整池、岩見沢市など市街地では親水公園が整備されている。2004年将来に引き継ぐ「北海道遺産」に選定。

会場

使われていない町有地を利用、春から秋を通して野花が見れる空間を作れないか。都市の人はそうしたものを求めている。

会場

80キロある北海道幹線水路。さまざまな工法を使った。一般の人が分かるような看板がほしい。それがあれば物の見方が変わる。是非、設置してください。

辻井

特別の植物を持つてくるのではなく、まだ、泥炭地に合う植物は多い。自然に増やす手段を考え、地図を作ることも必要。

眞野

財政的に厳しいが、公的機関の協力も得て実現に努力する。

会場

世界でも珍しい泥炭地を持つ南幌町。しかし、町外から来る人に対する配慮に欠ける。主要施設のマップさえもない。フットパスマップに記載してもらえないか。早急に作りたい。

フットパスの会場質疑

会場・舟木

道保護協会としてのお願いがあ。成果というものはすぐ出ないもの。幌向駅には保存状態は極めて良い。隣は改装して資料館に。あらゆる連携でねばり強い活動を。